

論文

写真資料を用いた宗教研究に関する試論

—1910～30年代のキリスト教会を事例に—

麻 生 将

〔抄 録〕

本稿は写真資料を用いた研究手法および写真資料の資料論についての試論である。本稿では1910年から30年代にかけての岐阜県大垣市と鹿児島県奄美大島のキリスト教会に所蔵されている写真資料を用いて、当時のそれぞれの教会の活動の様子やその時代的・社会的・政治的背景について、写真の被写体の種類や構図などの分析を通じての読解を試みた。その結果、それぞれの写真資料からは様々な共通点とともに教派や地域の文化、社会などの違いによる相違点が見いだされた。写真資料は宗教研究において、単に宗教集団そのものの分析にとどまらず、その宗教集団の背後にある時代的・社会的・政治的な文脈を読み解く上で有効かつ重要なテキストとなることが明らかになった。

キーワード 写真資料、近代、キリスト教会、岐阜県大垣市、奄美大島

I. 問題の所在

写真資料は近代の写真機の発明と普及に伴って出現したものであるが、歴史学、民俗学、地理学などの各分野において近代の諸現象や諸事象を研究する上で頻繁に使用されている。こうした分野では写真資料は有効かつ客観的な一次資料として捉えられているが、それは写真資料が該当する時代・時期の事物、人物、風景、事件、事象などをありのままに写し出したものであり、実証研究の重要かつ有益な根拠と考えられているためである。いうまでもなく、写真それ自体は撮影者の様々な目的や意図、思想が反映されており、撮影された時代や場所の社会経済的状况や政治性、権力関係などが内包されてもいる。そのため、単純に客観的なデータとみなすのではなく、たとえば被写体そのものの様子を見て分析するのか、あるいは被写体の構図に注目するのか、そこにどのように時代状況が写されているのか—あるいは写されていないのか—といった、いわば「写真資料の資料論」の確立が必要であることは言を俟たない。写真も

歴史的な事象を考察するための資料である以上、資料論や史料批判が必要不可欠であるが、現状においては写真資料の分析手法や史料批判の方法は研究者にゆだねられるケースが多く、系統的な分析手法や実証の理論が確立されているとは言い難い状況である⁽¹⁾。

また、歴史学研究の中にも、政治史や社会史、経済史、都市史、文化史、宗教史など多様なジャンルが存在し、それぞれのジャンルで用いられる資料の取り扱いや資料論も異なることがある。そのため、歴史学と関連する分野全体に共通する資料論とともに、ジャンルごとの資料論も必要になる。

そこで本稿では、近代のキリスト教史研究における写真資料の分析に関する試論を展開したい。今回は美濃ミッション大垣教会（岐阜県大垣市）と名瀬聖心教会（鹿児島県大島郡名瀬町）を事例とする。後述のように、写真の撮影年代はいずれも1910年代から30年代前半にかけてである。なお、本稿で使用する写真類は全て美濃ミッションもしくは聖アントニオ神学院所蔵のものであることを最初に断っておく。

Ⅱ. 美濃ミッション所蔵の写真

（1）美濃ミッションの概要

まず美濃ミッション大垣教会の写真資料についての説明を行う。詳細については表1に示したので、本稿では美濃ミッションの主な出来事について説明⁽²⁾を行う。美濃ミッションは1918年にアメリカ人宣教師ワイドナーによって岐阜県大垣市に設立されたプロテスタント系の教団である（図1）。大垣市は江戸時代には戸田藩の城下町で、綿工業などの繊維産業が盛んで、明治期以降も大垣市をはじめ岐阜県西部には複数の紡績や繊維関係の工場が立地した。ワイドナーは大垣市内の戸田伯爵家老屋敷を間借りして教会活動を行っていたが、それに加えて

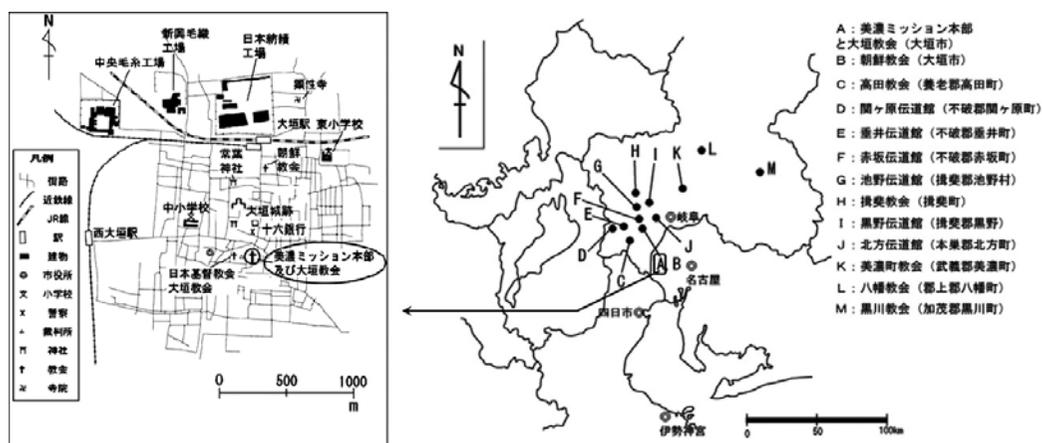


図1 地域概観（岐阜県と大垣市）

幼稚園を経営しており、市内の医師や市議員の子弟が通っていた。また、後述のように美濃ミッションは大垣中学校での英語教育も行っていった。『美濃ミッション設立願書類綴』⁽³⁾ (以下、『願書類綴』とする)によると、図1のように1930年の段階で岐阜県の西部を中心に計13か所の教会および伝道所を有していた。大垣市内での日常的な布教活動のほか、岐阜県西部の山間部での天幕伝道もたびたび開催し、岐阜県内の道路沿いにキリスト教布教のための看板を設置していた。教団の規模として、信徒は125名、宣教師や牧師、幼稚園のスタッフの合計は19名であった。美濃ミッション所属信徒のうち、大垣教会は69名であったが、そのうち30名が大垣市や名古屋市の紡績工場に勤務していた。30名は全員女性で、『願書類綴』中の信徒名簿には現住所として「日本紡績社宅」などと紡績工場の寄宿舎が記載されているものが大半であるが、出身地の住所(おそらく本籍地)として長野県や新潟県、福島県、栃木県などの地名の記載もみられる。こうしたことから、1930年ごろの美濃ミッションには各地からの出稼ぎ女性労働者⁽⁴⁾が信徒として属していたことがわかる。

その美濃ミッションをめぐるのは、1929年と1933年には美濃ミッション所属の小学生の信徒

表1 美濃ミッションの略年表

年月日	事項
1918.8	ワイドナー、独立宣教師として再来日
1918.11	大垣市1054番地にて「美濃ミッション」活動開始
1919.5	大垣市1054番地にて「私立大垣基督教幼稚園(以下、基督幼稚園)」開園
1920.5	戸田伯爵所有の家老屋敷(大垣市郭町15-1)を借り受け、「美濃ミッション本部」及び「私立大垣基督教幼稚園」(以下、基督幼稚園とする)移転
1925.7	伝道師伊能倉治郎・かく夫妻、美濃ミッションへ入団
1926.1	ミラー宣教師、初来日
1927.2	山本豊入団、聖書分冊配布に従事
1927.6	伊能倉治郎・かく夫妻、養老郡高田町の伝道館専属
1928.4	野原勘由、美濃ミッション管理補佐に就任 フィウエル宣教師初来日
1928.5	菊池三郎、美濃ミッションへ入団
1928.11	駒井梅、掛斐教会牧師に就任
1929.4	萩原莊三が美濃ミッションへ入団、張道源が美濃ミッション大垣朝鮮教会牧師に就任
1929.9	常業神社祭礼の際、美濃ミッションの児童4名が参拝を拒否
1930.3	神社参拝拒否、連日関連記事報道
1930.4	「市会憤議に燃ゆ」との報道
1932	山中為三が美濃ミッション聖書学校校長に就任 柳瀬直彌が美濃町教会(美濃ミッションの支部教会)牧師に就任
1933.6	美濃ミッション児童が伊勢神宮参拝拒否を理由に修学旅行に不参加
1933.6~9	美濃ミッション児童による伊勢神宮参拝拒否をめぐる新聞報道
1933.7	美濃ミッション排撃の市民大会、基督幼稚園の閉鎖運動、路傍伝道妨害などが報じられる 7月25日から10日間市内各地で排撃運動、在郷軍人会会長が排撃の決議文を表明
1933.8.21	父兄会・校友会が全校同盟休校を表明、美濃ミッションの3児童に停学処分
1933.8.22	美濃ミッションの全居住者15名が大垣警察署に召喚
1933.8.26	菊池・山中・柳瀬の3牧師が大垣警察署に召喚、教会行為停止と賛美歌禁止の命令を受ける
1933.9.20	ワイドナー・菊池・山中・柳瀬が上京、内務省警保局にて意見交換 その後、排撃運動自体は自然終息
1934.1	基督幼稚園、正式に閉園
1936-37	伝道師樋口ふじの、ジュリア、本山春江、パーワ、パップらが美濃ミッションへ入団
1939.1	教役者8名が美濃ミッションを退団
1939.12	ワイドナー死去、フィウエル宣教師がアメリカに帰国
1940	伊能倉治郎が美濃高田を離れ東京へ移ったことを契機に、美濃ミッションは活動を中断
1942	伊能倉治郎、山中為三両氏検束

麻生(2008)をもとに作成。

が神社参拝を拒否したことによる地域社会からの排撃が生じ（美濃ミッション事件）、特に1933年には地元の学校関係者やPTA組織、在郷軍人会、政治家など多様な人々による組織的な排撃運動が展開された。その中で幼稚園の閉園運動がPTA組織によって展開されたほか、地元新聞紙上で排撃に関する多様な言説がみられ、排撃の住民大会の案内や会の詳細が報道された。排撃事件そのものは幼稚園の閉園と神社参拝を拒否した生徒の停学処分の後で自然に終息したが、美濃ミッションは事件の後も岐阜県内にくわえ三重県でも伝道を行った。1939年に設立者のワイドナーが病没し、翌年に活動を休止した美濃ミッションは1946年に活動を再開し、2021年現在は岐阜県大垣市と三重県四日市市に合計3か所の教会を有している。

（2）美濃ミッション所蔵写真の分析

筆者は2017年11月に美濃ミッション本部がある三重県四日市市の富田浜聖書教会を訪問し、所蔵資料の調査を行った。その際に確認された美濃ミッション所蔵の写真資料は220点である。これらをいくつかの観点から分類していく。まず撮影場所であるが、屋外で撮られたものが179点、屋内撮影が41点と、大半が教会などの建物の外で撮影されていた。また、被写体の種類としては1人から数名の人物を写したものが106点と所蔵写真のおよそ半数を占めていた。続いて信徒や幼稚園の生徒などの集合写真が70点である。そして日常的な活動の様子が16点、美濃ミッション本部の建物が12点、美濃ミッションの活動に関わる看板が6点、屋外の景色が3点、集会の様子が2点、手紙と列車を写したものが各1点となっている。このように、人物を写したものが大半を占めていたことがわかる。

なお、撮影場所の住所については、その大半は大垣市内で212点である。その他は三重県内が4点、岐阜県内の山中が1点、静岡県と宮城県が各1点⁽⁵⁾である。これらのことを踏まえると、主要な活動拠点であった大垣教会において人物の写真や集合写真を屋外で撮影したものが大半を占めていた、という美濃ミッションの所蔵写真の傾向がつかめるであろう。

なお、美濃ミッションの所蔵写真220点のうち、18点の絵葉書が確認された。これらは全て屋外で撮影されたもので、大半は集合写真である。絵葉書の裏面に写真が印刷されていることから、何らかの目的で作成されたと考えられるが、この点については後述する。

ここからいくつかの写真を見ていくが、今回は被写体のジャンル別に図2～図13の写真を検討する。はじめに特定の人物を写した写真についてである。図2は美濃ミッションの宣教師を写したものであるが、このうち左の写真では宣教師が着物姿で写っている。後述のように美濃ミッションは経済的支援を受けていたアメリカの教会やクリスマスチャンへの報告⁽⁶⁾のために活動の様子を写した



図2 美濃ミッション写真（人物・宣教師）

写真を絵葉書にして送っていた。その一方で絵葉書になっていない写真類が大半を占めるが、図2の宣教師の写真も絵葉書にはなっていない。そのため、報告用に撮影されたわけではないのかもしれないが、写真を手紙に同封するなど別の報告手段がとられた可能性も考えられる。この点については今後の検討課題であるが、外国人の宣教師がこうした日常の一コマを写真に収めていたことから、何らかの記録用または記念として撮影された可能性も指摘できよう。

図3は美濃ミッシンの宣教師と牧師の写真である。美濃ミッシンのスタッフたちの集合写真とも捉えられるが、写真の中央前列に設立者のワイドナー、中央後列にワイドナーの後輩の宣教師2名で、前列後列それぞれの両端に日本人の牧師および教会スタッフという配列である。設立者がセンターという構図は珍しいものではないが、後列のセンターに女性宣教師が位置していることから、当時の美濃ミッシンにおいては外国人宣教師が教会ならびに



図3 美濃ミッシン写真
(人物・宣教師と牧師)

教団運営の中核メンバーであることにくわえ、日本人スタッフから日常的に尊敬の念を持たれていた可能性が考えられる。また、想像力を働かせるならば、女性の外国人宣教師と男性の日本人牧師との関係が通常のジェンダーの観念とは異なる、別の原理に基づいて成立していたことを伺わせる構図の写真ともいえよう。この点については近代の日本における日本人キリスト教徒と外国人宣教師との関係性を検討するうえでも有力な手掛かりになり得るのかもしれない。

続いて図4の写真には日本人牧師が自身の子供を抱えている様子がみられるが、外国人宣教師のみならず日本人の牧師も被写体となっていた。図5と図6は信徒の写真である。おそらく牧師または宣教師と特に関係が深かった信徒について、何らかの記念に撮影されたものと考えられる。図6については写真の裏に人名と撮影年月がタイピングされており、被写体も一人の、それもおそらく10代の学生であることから、何らかの特別な意味を有する一たとえば何かの記



図4 美濃ミッシン写真
(人物・牧師とその家族)



図5 美濃ミッシン写真
(人物・信徒)



図6 美濃ミッシン写真
(人物・信徒、裏面に説明入り)

念やメモリアルな意味—写真であったことを示唆している。このように、特定の数名の人物を被写体とする写真については、その被写体の人物についての特別な意味合いがあって撮影されたものと考えられ、被写体の人数や構図にそうした何らかの意味合いが反映されていると推察できる。



図7 美濃ミッション写真（人物・天幕伝道の様子）

なお、図7の時期は不明であるが、美濃ミッションが岐阜県西部の山間部で天幕伝道、すなわち巨大なテントを張って行われた伝道集会の際に撮影されたものである。先述のように美濃ミッションは大垣市や関ヶ原町、垂井町など小都市のみならず山間部の村落へ積極的に伝道していた。別の天幕伝道の写真には大勢の聴衆がテントの中を埋め尽くす様子が写されており、1920～30年代において基督教の、それもアメリカ人の女性宣教師が山間部に来訪すること自体珍しかった⁽⁷⁾ こともあって、大勢の住民が参加していたのであろう。

続いて図8～図10はいずれも集合写真である。このうち図8はワイドナーと女性信徒の集合写真である。美濃ミッション本部の建物をバックに撮影されたもので、教会関係の写真の中でも最もポピュラーな構図である。すなわち、教会という宗教活動の拠点にして、クリスチャンにとっては特別な意味を持つ教会という建物に集う仲間—兄弟姉妹と呼ぶことが多いが—の、いわば家族のような共同体の写真、という意味合いを持つことは言うまでもない。そして、通常は牧師や宣教師を中心に据え、その周りを信徒が囲むというのが一般的な構図であるが、この写真は少し様子が異なる。写真中央部の左側がワイドナー、右側が後輩の宣教師であるが、彼女たちに挟まれるように日本人の女性信徒がセンターポジションという構図である。この写真については特に説明は確認されていないため、撮影時期や目的は不明であるが、センターの女性信徒に関する特別な出来事—たとえば洗礼などを祝い、記憶するために撮られた可能性が高い。なお、付け加えておくと、『願書類綴』には1930年ごろの美濃ミッション所属の信徒すなわち美濃ミッションで洗礼を受けたか、または他の教会で洗礼を受けた信者が転入した信徒の氏名が記されているが、大垣教会の信徒69名中女性は51名で、およそ4分の3を占めている。すなわち大垣教会はジェンダーの観点から考えると、近代の日本、それも家父長制の下で男尊女卑的な社会構造が強固だった時代にあってはある意味で特異な空間であったことが指摘できるし、それを象徴する図8のような写真は近代の基督教をはじめとする宗教に関わる組織とその空間のジェンダーに関する様々な示唆を我々に与えている。

図9は美濃ミッション経営の幼稚園の集合写真である。前に述べたようにこの幼稚園には大垣市内の医師や市会議員の子弟が通っていた。この写真は葉書の裏側に印刷されており、絵葉



図8 美濃ミッション写真
(集合写真・宣教師と信徒)



図10 美濃ミッション写真
(集合写真・旧制中学)



図9 美濃ミッション写真 (集合写真・幼稚園)

書として作られていた。先述のように、美濃ミッションに資金などの援助をしていたアメリカの教会やクリスチャンへの報告用にこうした絵葉書が作成、郵送されていた。美濃ミッションにはこうした絵葉書が18枚所蔵されており、そのうち17枚はこうした集合写真または特定の人物を屋外で撮影したものである。教会の活動の様子を支援者に伝える際には教会を構成するメンバーや幼稚園の園児、日曜学校の生徒など教会に集う人々が生き生きと活動する写真が相手に謝意と信仰上の想いを伝えるうえで最も有効であったと考えられる。この点は宗教活動に関する心理学的なアプローチの新たな道を開き得る可能性も十分考えられよう。

そして図10の写真には大垣市内の旧制中学校の生徒と教師、そして右端にワイドナーが写っている。『願書類綴』には美濃ミッションの活動概要の一つとして「官立学校生徒ノ聖書英語組」と記載されているが、この写真はまさにこの活動の実際の様子を写したものである。旧制中学校に通う生徒の家庭はある程度の経済力と社会的地位を有していたため、先の図9の幼稚園の園児の家庭と併せて考えると、美濃ミッションは地域社会の中でも比較的上位の社会階層とのつながりを持っていたことが伺える。

なお、美濃ミッションの所蔵写真の中には主要な被写体が人物以外のものが26枚含まれており、その中でも建物写真が12点と最も多い。図11と図12はいずれも大垣教会の建物の外観である。図11は戸田伯爵家老屋敷の前に間借りしていた建物の写真であり、美濃ミッションの最初に教会として利用されていた。これは絵葉書の中で唯一人物以外のものが被写体となった写



図11 美濃ミッション写真（大垣教会の建物）



図12 美濃ミッション写真
（戸田伯爵家老屋敷時代の
大垣教会の建物）

真である。これを絵葉書にしたということは、ここが美濃ミッションという教団の出発点、原点となった特別な場所であるという意味が込められているのかもしれない。美濃ミッション本部そして大垣教会はその後図12のように戸田伯爵家老屋敷に移り、活動休止するまで同屋敷で活動を続けていた。図12のように毎週礼拝のたびに立て看板を玄関前に設置していたが、現在でも多くのキリスト教会では日曜礼拝ごとにその日の牧師の礼拝説教のタイトルを掲示板や教会の玄関などに掲示している。教会の日常的な活動のアピールとともに、こうした看板それ自体が周辺住民への布教活動の一環でもあったのだろう。

最後に図13を検討して美濃ミッション所蔵写真の結びとしたい。この写真の被写体である看板は、言うまでもなく布教目的で道路沿いに設置されたものである。注目すべきはまずこれらの看板が設置された場所の空間情報である。左の看板が大垣市内またはその周辺に設置されたことは写真の裏面のOgakiという言葉から読み取れる。左の写真の中心には聖書の一節が書かれた看板があるが、その背後の景観を見ると、建物は無くは野原が広がっていることから、市街地ではなく郊外である可能性が高い。大垣市内の旧市街よりもむしろ郊外の方が看板の設置が容易であったと考えられるが、くわえて大垣市内では日常的に路傍伝道という、道端に立って行人にキリスト教の教えを呼びかけ、聖書の教えを印刷した冊子を配布するなどの布教活動を行っていたため、市内での看板設置は必要性が小さかったであろう。そしてこれらの写真から、地方都市の郊外での布



図13 美濃ミッション写真
（布教用の看板）

教用の看板設置によってある種の宗教景観、それも「伝道景観」とでも呼び得る景観が形成され、地元の人々に視覚的な布教を行う機能を有する景観を美濃ミッションが積極的に形成していたことが示されている。

なお、図13の右側の写真に写る看板は飛騨地方の有名な温泉地に設置されたことが裏面の記述から読み取れるが、その日時が1935年6月21日となっている点が興味深い。というのは、美濃ミッションが神社参拝拒否による地域社会からの排撃運動を受け、幼稚園の閉園と参拝拒否児童の停学処分が下ったのは1933年の秋ごろである。それから2年弱あまりの時間の後、岐阜県内にこうした看板を設置すること可能であったわけだが、この頃になると美濃ミッションに対する排撃が収まっていたことをこの写真は示唆している。宗教集団に対する地域社会からの排撃運動が終息するとき、言い換えれば排除のゴール地点とも呼ぶべきタイミングないし契機について考えるうえでこの写真は重要な情報を示しているのではないだろうか。

このように美濃ミッションに所蔵されていた220点の写真類は被写体やその構図の多様さもさることながら、それぞれの写真が示唆するもの、写真の背後に横たわる種々の社会的状況や文脈の多種多様な状況を雄弁に物語っているのである。

Ⅲ. 名瀬聖心教会の写真

(1) 名瀬聖心教会の概要

つづいて名瀬聖心教会の写真資料についてであるが、それに先立ち奄美大島のカトリックの概要⁽⁸⁾を説明する。詳細については表2に示し、本稿では奄美大島のカトリックの概略を述

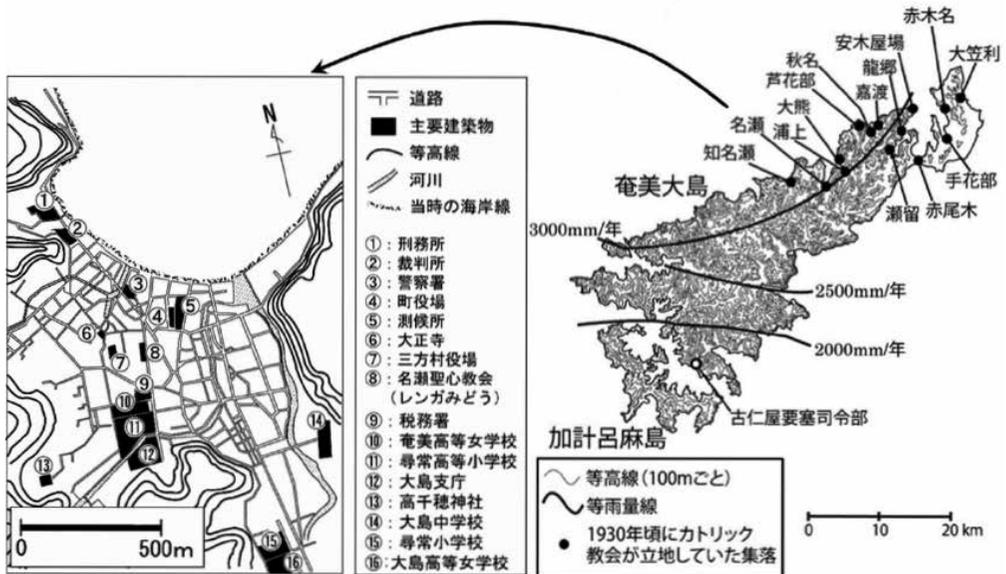


図14 地域概観 (奄美大島と名瀬町)

表2 奄美大島のカトリックの略年表

年	カトリック関連	関連事項
1891	名瀬の裁判所検事がキリスト教宣教師の招聘を呼びかける 12月 バリ外国宣教会のフェリエ神父が来島	
1893	夏 ノロや反カトリック集団による排撃	
1894	1月 フェリエ神父が名瀬に土地購入、教会堂建設開始 カトリック信者への投石などの嫌がらせ	7月 日清戦争開始
1896	10月 仏教僧侶によるカトリック非難と島民対立	
1902	レンガみどう建設着工	
1904	大笠利で集団洗礼	2月 日露戦争開始
1914	8月 複数の神父が欧州戦線に召集、島内は神父、宣教師、修道士などスタッフ不足となる	7月 第一次世界大戦開始
1920		この頃「そてつ地獄」が始まる
1921	7月 ローマ法王庁が鹿児島・沖縄両県の教区をバリ外国宣教会に代わってフランシスコ会 カナダ管区に委託	奄美大島要塞（古仁屋要塞）建設開始
1922	レンガみどう完成 10月 米川基神父が来島、着任	ワシントン海軍軍縮条約締結 10月 名瀬村から名瀬町に改変
1924	1月 大島中学4年の2生徒（カトリック信者）が神社参拝拒否、放校 4月 大島高等女学校開校、米川基神父が校長就任 12月 大島高等女学校の教育勅語奉読不実施をめくって県議会での質疑報道	
1926	5～6月 要塞地帯の機密地図流出とカトリック関係者へのスパイ疑惑の報道	
1927	10月 ローマ教皇庁使節が来島	8月 昭和天皇の奄美大島行幸
1929	10月 大島高等女学校が伊勢神宮式年遷宮式で遷拜式を不実施 11月 名瀬町有志による大島高等女学校に対する調査と処分を当局へ要請、陳情	10月 世界恐慌
1930		10月 ロンドン海軍軍縮条約締結
1931		9月 満州事変
1933	7月 名瀬町役場での大島高等女学校の開校に関わる契約文書の紛失報道 8月 大島高等女学校廃校を求める名瀬町民大会開催 9月 名瀬町議会が大島高等女学校の廃校を議決 10月 名瀬町往来にカトリック排撃ビラ貼付 12月 文部省が大島高等女学校の廃校を許可	4月 瀧川事件 6月 美濃ミッション事件
1934	3月 大島高等女学校廃校 9月 県立奄美高等女学校が大島高等女学校跡に移転 12月 名瀬町民大会開催、外国人神父の島外追放、秋名教会の襲撃と破壊など、カトリック 排撃運動が本格化	
1935		12月 第二次大本事件
1936	3月 カトリック排撃運動を先導した奄美大島要塞司令部の笠少将が名瀬町長に就任 6月 キリスト教排撃町民大会 7月 大笠利教会が焼失	2月 二・二六事件
1937	6月 奄美大島のすべての教会不動産を鹿児島県が島内の各町村に払い下げる	
1938	6月 レンガみどうへの名瀬町役場移転完了 11月 無線電話開通と名瀬町役場庁舎移転改築の祝賀式典	4月 国家総動員法発布
1939	日本人神父が密かに来島	
1941		12月 太平洋戦争開始
1945	4月 米軍の空襲によりレンガみどう焼失	8月 太平洋戦争終結

麻生（2011）をもとに作成。

べる。奄美大島は江戸時代には薩摩藩の植民地支配の中でサトウキビのプランテーションが行われ、明治期以降も本土との経済格差⁽⁹⁾が問題となっていた。そこで、奄美大島の近代化を目的とした奄美大島のある役人の招きに応えたバリ外国宣教会の宣教師が、1891年に来島したことを契機としてカトリック布教が始まった。布教当初は地元の民間信仰や仏教の関係者との軋轢もあったが、島民の多くが経済的な困窮にあえいでおり、生活の向上や社会福祉の充実を期待していたことから、島の北東部を中心に広まり、1930年ごろには島内に14か所の教会と4000人以上の信者を有するようになった（図14）。島の中心都市である名瀬町には1922年に名瀬聖心教会が建設された。カトリックは島内で無料診療や幼稚園経営などを行っていたが、1924年に大島高等女学校（以下、大島高女とする）を開校した。これは名瀬町の町会議員たちが女子教育の充実をカトリック教会に要望したことによるのだが、開校直後から同校の教育内

容をめぐって「非国民的」「不敬」などの言説に基づく閉校の陳情活動が地元の有力者らの手で行われた。

やがて1933年ころからカトリック信者や宣教師に対するスパイ疑惑が地元新聞で報道されると、カトリックへの排撃運動が始まった。当初は大島高女の廃校運動が地元のジャーナリストや町会議員、大島紬の関係者や仏教の僧侶など多様な人々によって行われ、翌年3月に同校は閉校した。そして1934年末ごろから奄美大島に駐屯していた陸軍将校⁽¹⁰⁾によるカトリックの排撃運動が島の各町村で展開され、全宣教師が追放されるとともに、残された信者たちは地元住民たちによって棄教を余儀なくされた。その結果、カトリック側は名瀬町の名瀬聖心教会をはじめ島内の全ての教会不動産を鹿児島県に寄贈し、第二次世界大戦終結までカトリックのコミュニティはほとんど壊滅した。寄贈された教会不動産は鹿児島県から島内の各町村に払い下げられ、カトリックを排撃した側にとって利する形で町役場などの公共インフラに転用され、カトリックの排撃を正当化する建物としての意味付けがなされた。

(2) 聖アントニオ神学院所蔵写真

筆者は2007年5月と2018年2月に東京都世田谷区の聖アントニオ神学院を訪問し、同院附属図書館に所蔵されていた19世紀末から20世紀前半の鹿児島県奄美大島のカトリック関連の写真資料を閲覧した。このうち、名瀬町で撮影されたものが138点であったが、その内訳は名瀬聖心教会関連の写真が87点、大島高女のもものが51点である。本稿では教会の活動に関わる写真を対象とするため、名瀬聖心教会関連の写真資料を分析対象とする。こちらも美濃ミッション所蔵写真と同様に司祭・宣教師の近影、信徒の集合写真、教会関係の行事、建物、などに分類される。全ての写真はアルバムに収められ、写真の横にキャプチャーが付いており、撮影年や写真の背景が記載されている。

名瀬聖心教会の87点の内訳をいくつかの観点から分類すると次のようになる。まず屋外で撮影されたものが53点、屋内が34点である。美濃ミッションと同様に屋外で撮られたものが多いが、その差は美濃ミッションよりも小さい。すなわち教会などの建物内で撮影されたものの割合が高いのである。また、写真の内容としては集合写真が33点と最多で、活動の様子が24点、人物が20点、建物が8点、船が2点、となっている。こちらも人物を写したものが過半数となっており、人物以外の写真もいくつかみられる点は美濃ミッションと共通する特徴である。なお、名瀬聖心教会関連の写真には絵葉書が含まれていないが、この点は美濃ミッションとの大きな違いである。

さて、名瀬聖心教会の所蔵写真については図15～図24にその一部を示しているが、こちらも美濃ミッション所蔵写真と同様に被写体ごとに検討していきたい。

まず図15から図17は、人物が被写体の写真である。このうち図15の上は外国人宣教師を、下はシスターをそれぞれ撮影したものである。外国人宣教師およびシスターのこうした写真は15



図15 名瀬聖心教会写真
（人物・人物・上が宣教師、下がシスター）



図16 名瀬聖心教会写真
（人物・右がヴァチカンの使節、左が日本人神父）



図17 名瀬聖心教会写真
（人物・信徒）

点所蔵されているのに対し、図16の日本人神父のものは2点のみであることから、奄美大島における外国人宣教師のポジションが相当高く、優位であったことが伺える。この点は美濃ミッションと対照的である。美濃ミッションの人物写真のうち、宣教師を写したものは約20点残っているが、日本人牧師を写した写真も同程度確認されている。また、図17は一般信徒が被写体となった唯一の写真である。この信徒は1933年以降のカトリック排撃の中で迫害に耐えながら最後まで信仰を捨てずに終戦まで過ごした⁽¹¹⁾ののだが、こうした生き様が特別視され、宣教師や神父以外で写真が特別に撮られたということなのであろう。美濃ミッションの場合は信徒が被写体の写真が36点と、むしろ宣教師や日本人牧師がメインの被写体の写真よりも多い。名瀬聖心教会における人物写真は、教会の運営の中心であった外国人宣教師の主要な役割と地位を示すものだった可能性が極めて高い。美濃ミッションとのこうした違いがカトリックとプロテスタントという宗派の違いによるのか、あるいは大垣市と名瀬町の地域の文化的、社会的背景の違いによるのか、それとも他の要因によるのかはこれらの写真資料だけでは断定するのが困難である。ただ、こうした明確な差が確認できることは事実であり、宗教研究や地域史、歴史地理学などの各分野において少なからず示唆的な情報となることは確かであろう。



図18 名瀬聖心教会写真 (集合写真・信徒)



図20 名瀬聖心教会写真
(集合写真・大島高等女学校)



図19 名瀬聖心教会写真
(集合写真・宣教師と信徒)



図21 名瀬聖心教会写真
(集合写真・教会内)

続いて図18から図21の集合写真について見ていこう。これらは教会を背景に撮影されたものが大半であることから、美濃ミッションと同様に教会関係の写真の中でも最もポピュラーな構図であり、クリスチャンにとっては特別な意味を持つ教会という建物に集う仲間一兄弟姉妹と呼ぶことが多いが一の、いわば家族のような共同体の写真である。図18はこうしたクリスチャンの集団の特質にくわえ、集合した人々の背後の部分から教会建物の空間情報を読み取ることが可能である。この写真のキャプションには1914年とあるが、名瀬聖心教会が完成するのは1922年であり、この写真が撮影された時はまさに建設途中だったのである。1920から30年代の名瀬町では名瀬聖心教会の建物はレンガみどろと呼ばれ、町内で数少ない近代的で堅牢な建造物であった。木造平屋または2階建ての建物が大半であった近代の名瀬町にあって高さ10mをゆうに超えるような赤レンガのモダンな建築物は相当に目立っていたであろうし、後にカトリック排撃後に町役場として転用される過程でカトリック排撃を正当化する景観となったのも、こうした視覚的なインパクトが大きく関係していたが、言い換えればこれほどの建造物は完成までに相当の年月が必要であったことを図18の写真は物語っている。

図19はその名瀬聖心教会が完成した直後の1922年に撮影されたものである。宣教師をセン

ターにして、その周りを信徒が囲むという構図は教会の集合写真の中でも最もポピュラーなものであることは先に述べたが、この写真は左上にローマ教皇の使節が奄美大島を巡視した際の記念撮影であることの記載がみられ、カトリックにおいてはヴァチカンからの使節が極めて重要視されていたことがよく分かる1枚となっている。それはこの写真中の日本人信徒が正装であることから明らかである。

図20は大島高女の集合写真であるが、名瀬聖心教会関連の写真として保存されていた。同校の写真資料については別稿で検討したいが、教会写真と同じように学校の集合写真もまた、活動の主たる施設であり、学校の象徴でもある校舎を背後に撮影されている。ただし、この写真の注目すべきポイントは、被写体の配置である。写真の最後列の両端に外国人宣教師らしき人物が移っており、写真の中央は生徒である。これは教会での集合写真とは異なる原理による構図であろう。たとえば「学校の主役である生徒をメインの被写体にする」などの考えに基づくのかもしれない。教会での信徒と聖職者の集合写真はいわば宗教的な時間・空間を切り取ったものであるのに対し、宗教団体の付属学校の集合写真はいわば世俗的な時間・空間を切り出したものであることから、被写体である人物たちの配置に何らかの違いを生じさせた可能性がある。

なお、図21について興味深い点は、この集合写真が屋内で撮影された、ということにくわえ、クリスマスの教会行事を写した点である。美濃ミッションの場合、クリスマスやイースターなどの宗教行事の写真は確認されていない。名瀬聖心教会関連の写真の中にはこうした宗教行事のほか、日常的な礼拝の様子を写したものが複数枚（図23、図25の下）確認できる。こうした点



図22 名瀬聖心教会写真
(活動・聖体行列)



図23 名瀬聖心教会写真 (活動・礼拝)



図24 名瀬聖心教会写真（活動・幼稚園）



図25 名瀬聖心教会写真（建物・上が教会の外観、下が教会内部）

も美濃ミッションとの大きな相違点、すなわち写真撮影の目的の違いとも関連すると推察できる。

図22は1927年10月に行われた聖体行列の写真である。これは大島高女の開校を記念してヴァチカンの使節が来島したときのものである。聖体行列の数か月前には昭和天皇の奄美大島行幸が行われ、島全体で昭和天皇を歓迎する雰囲気がみられたが、カトリック信者にとっては聖体行列の方がむしろ重要であった。その一つの証拠として、聖アントニオ神学院には聖体行列の写真が13点確認されたのに対し、昭和天皇の行幸写真は残っていない点があげられる。こうし

た写真の残存状況からは、奄美のカトリック信者にとっては大日本帝国の頂点に立つ天皇というナショナルな空間スケールの権威よりもヴァチカンの、すなわちローマ法王の使節という、よりグローバルな空間スケールの権威を重視していた点が指摘できるのである⁽¹²⁾。

なお、図23や図25の下の写真については前述のように日常的な礼拝の様子を撮影したもので、美濃ミッション所蔵写真にはみられない種類のものである。カトリック関係者にとって日常的な礼拝の様子はある種重要な記録であったとみられ、だからこそ写真が残ったのである。

そして図24は名瀬聖心教会関連の日常的な活動の中でも、附属の幼稚園の活動を写したものである。美濃ミッションでも同様に教会が経営していた幼稚園の活動は、教会にとってもキリスト教教育や幼児教育の点から重要なものであったことが伺える。また、図24右上の写真では幼稚園の園児と宣教師らしき人物たちがグラウンド（広場？）に円形で集まっている様子が写し出されているが、写真の奥には名瀬聖心教会の建物が見える。つまり、この幼稚園は教会に隣接した場所で経営されていたことが読み取れる。こうした教会と幼稚園の位置関係という空間情報も確認することができるのである。なお、図24の左の写真は1932年ごろに撮影されたと考えられるもので、教会付属の幼稚園児が名瀬町の運動会に参加しているところが写っている。これについても、カトリックの排撃運動が本格化する直前の、カトリックと地元住民との関係を示す象徴的な1コマである。つまり、排撃運動それ自体は日常的なカトリックに対する警戒感や忌避感などの堆積が背景にあるのだが、他方で地元住民とカトリックおよび幼稚園とはむしろ良好な関係を築いていた。それが社会的、政治的な要因によって排撃運動へと急速に舵を切ることになった。すなわち、地域社会と宗教集団との関係性の劇的な変化を物語る1枚なのである⁽¹³⁾。

最後に図25の上の写真、すなわち名瀬聖心教会の外観写真について述べ、名瀬聖心教会の写真資料の分析の結びとする。名瀬聖心教会は1922年に完成したレンガ造りの建造物で、先述したようにこの当時の名瀬町の中でその材質、大きさ、色において相当異質な存在であった。この建物は町の中心部の、大島支庁に通じるメインストリートであった支庁通り沿いに立地していた。また、正面玄関は名瀬湾に向いており、入港の際に船上からもよく見えたことだろう。図25の上の写真はその正面側を撮影したものである。この名瀬聖心教会の建物—レンガみどうとも呼ばれた建物—は一連のカトリック排撃運動の中で排撃側であった名瀬町という地方自治体に利する形で町役場に転用され、ナショナルな文脈でカトリック排撃を正当化する物語のほか、名瀬町そして奄美大島の発展を予感させる、というローカルな文脈の物語が付与された。宗教集団の排除においては様々な空間スケールの文脈がせめぎあい、あるいは重層的な状態となって立ち現れるのだが、この名瀬聖心教会の建物はそうした排除に関わる複雑な物語を体現した景観、いわば排除の景観⁽¹⁴⁾を形成する建物となったのである。そしてその過程で頂上の十字架が切り落とされて代わりに日の丸が設置されることで、建物の材質や大きさ、色の視覚的なインパクトとともに、大日本帝国への愛国心と忠誠心を住民に植え付けたのである。この

ように、近代のキリスト教関係の写真は単に宗教集団そのものの被写体だけにとどまらず、そこから世俗の世界の様々な文脈を読み解く上で有効かつ重要なテキストともなり得るのである。

Ⅳ. 結論と今後の課題

本稿では20世紀前半、1910～30年代の2つのキリスト教会関連の写真資料について検討を行った。その結果、明らかとなった共通点と相違点がそれぞれ以下のように示された。

共通点としては、第一に教会の指導者である神父・牧師・宣教師らの近影写真の存在が指摘できる。どちらの教会も外国人宣教師が教会の設立や運営に深くかかわったことから、教会組織の重要人物として彼らの近影や、あるいは彼らをセンターに配置して撮影された集合写真が複数枚確認された。第二に、信徒の集合写真の大半が教会の建物を背後に撮影される構図である。これはその教会に所属するメンバーの団結心や絆を表すとともに、教会の規模を他教会や後の時代に向けてアピールし、記録として残す意図も考えられる。そして第三に、両教会は付属の幼稚園を経営しており、その活動の様子も写真に収められている点である。

いっぽう、相違点は以下の通りである。第一に絵葉書の有無である。美濃ミッション所蔵写真のうち18点が絵葉書で、美濃ミッションが経営していた幼稚園の集合写真や日曜学校、天幕伝道の活動報告のために、撮影した写真を絵葉書にして内外に送っていた。これに対して名瀬聖心教会関連の絵葉書は確認されていない。カトリックの場合は絵葉書とは別の手段で外部に活動実態を報告していたとみられる。第二に宗教活動の写真の有無である。礼拝中の写真が美濃ミッションには残されていないのに対し、名瀬聖心教会には複数の写真に残されている。他方、伝道活動の様子について美濃ミッションでは天幕伝道や聖書中の言葉の立て看板などの写真が撮影されているが、名瀬聖心教会ではそのような写真が無い。これは教会が地域に定着した年数や宗派の違いが影響していると考えられよう。第三には宣教師の服装が挙げられる。美濃ミッションの宣教師の写真の中には着物姿で撮影されたものがあるが、名瀬聖心教会の宣教師は誰一人着物を着た写真を撮影していない。これについては宗派ごとの考え方の相違にくわえ、地元社会への定着度合いの違いや、または文化の受容の違いも考えられる。さらにはカトリックとプロテスタントそれぞれの人物写真の撮影の目的や意味の違いも関わるのかもしれない。そして第四に信徒の写真の数の違いである。美濃ミッションには信徒個人の写真が複数存在するが、名瀬聖心教会は信徒個人の写真が1種類のみである。これは信徒と宣教師との人間関係の距離の違いや撮影の目的の違い、もしくは信徒の人数の違いなどが想定できる。美濃ミッションの場合は教会の信徒が70名あまりで、教団全体でも125名であったのに対し、名瀬聖心教会を含む奄美大島のカトリック信者は4000名を超えていた。そのため、信者一人ひとりと神父、宣教師との心理的ないし社会的な距離感の違いが生じ、それが人間関係の強さを規定した結果、信徒の写真撮影に対する考え方の違いに影響を与えた可能性も考えられる。

以上、本稿では教会関係の写真資料の分析において、被写体の構図や写真中の空間情報の読み取りだけでなく、写真の背景に横たわる政治的、社会的、経済的な文脈、あるいはナショナルやローカル、グローバルといった多様な空間スケールを読み解く上で有効で重要なテキストとなり得る可能性を一定程度示すことができたと考える。とはいえ、本稿は2つの教会という少ない事例からの限られた分析しか成しえず、美術史や図像学といった美術研究の成果を踏まえることもほとんどできなかつた。今後はこうした課題を克服すべく事例の更なる蓄積に取り組み、宗教研究における「写真資料の資料論」の確立に向けて取り組んでいきたい。

〔注〕

- (1) たとえば地理学における写真資料については次の研究がある。まず石井の一連の研究（1988, 1999）が挙げられるが、これは既存の写真資料よりもむしろ風景ないし景観写真の撮影のテクニックや写真からの空間情報の読解に主眼が置かれている。また、地理教育における景観写真の活用に関する研究も地理学における写真資料研究の大きな流れで、たとえば原（2012）や加賀美・荒井ら（2018）の論考が挙げられよう。他方で、近代の奄美大島で撮影された渋沢フィルムを用いた景観復元については須山（2007）の論考があり、また、近代奄美大島のカトリック関連の写真資料を検討した筆者の拙稿（2021）がある。さらに筆者らは写真資料や絵図資料などの視覚資料の地理学研究での利用に関しても検討を行った。詳細は麻生・長谷川・網島（2019）を参照のこと。なお、緒方・後藤ほか（2012）にみられるように近年は歴史学や社会学などの分野においても写真資料研究が盛んに行われている。
- (2) これについては美濃ミッション所蔵の史資料のほか、筆者の拙稿（2008, 2018a）による。
- (3) この資料は美濃ミッションが1930年ごろに文部省と岐阜県に宗教法人の設立許可申請を行った際に提出された書類である。なお、このとき宗教法人の設立許可は下りなかったが、美濃ミッション事件が原因とも言われている。石黒（2001）参照のこと。
- (4) 松井によると、こうした出稼ぎ女性労働者たちは工場の寄宿舎が立地していた地域の住民たちから差別的なまなざしを向けられていたという。美濃ミッションに対する排撃運動の背景として、日常的な差別の堆積があったのだが、その一つがこうした女性労働者への差別であったと考えられる。なお、美濃ミッションには在日朝鮮人の信徒や母子家庭の親子の信徒も属していたが、当時社会的に差別されていたこうした人々を積極的に内包した結果、美濃ミッション自体もまた差別の対象になり、後の排撃運動の遠因になった。
- (5) このうち宮城県の写真は着物姿のワイドナーを宮城県のミッションスクールの教員時代に撮影したもので、静岡県の写真は美濃ミッション関係者の誰かが熱海を旅行した際に撮影した写真と考えられる。
- (6) 美濃ミッション所蔵資料の中には、アメリカの支援者に資金援助を要望するワイドナーからの手紙が残されている。
- (7) 美濃ミッションの女性宣教師たちはバイクや自動車でも山間部を訪問していた。
- (8) 奄美大島の概要については宮下（1999）のほか、拙稿（2011, 2017）による。
- (9) 20世紀前半以降も奄美大島と本土との経済格差が大きかったため、鹿児島県議会で奄美大島出身の議員が島の振興を訴える様子が地元新聞でたびたび報道された。また、大正から昭和前期にかけての不況により、島民の生活は困窮を極め、ソテツのどんぶんを食して中毒死する人々が続出する「ソテツ地獄」という状況が生じていた。
- (10) このとき排撃を住民に熱心に訴えた将校の一人は排撃運動の数年後に名瀬町の町長に就任した。
- (11) この人物は第二次世界大戦終了後に鹿児島県経由で島内の自治体の所有となっていた教会不動産の返還をはじめ島内のカトリックコミュニティの復活に尽力する理事会の主要メンバーの一人になった。筆者の拙稿（2018b）を参照のこと。

- (12) 筆者の拙稿 (2021) による。
- (13) (12) と同じ。
- (14) 筆者の拙稿 (2011) を参照のこと。

〔参考文献〕

- ・麻生将 (2008) 「宗教集団をめぐる社会-空間的排除のプロセス—1930年代の「美濃ミッション事件」を事例として—」歴史地理学50 (3)、15-31.
- ・麻生将 (2011) 「1930年代奄美大島におけるカトリックをめぐる排撃と「排除の景観」の形成」人文地理63 (1)、22-41.
- ・麻生将 (2017) 「近代日本におけるミッションスクールをとりまく言説空間と排除—大島高等女学校を事例として—」立命館文学第650号、154-173.
- ・麻生将 (2018a) 「近代日本における女性出稼ぎ労働者とキリスト教—美濃ミッションを事例として—」立命館文学第656号、188-204.
- ・麻生将 (2018b) 「鹿児島県奄美大島のカトリックと地域社会—そのめまぐるしい相互関係の変化—」(平岡昭利監修、須山聡・宮内久光・助重雄久 編著『離島研究VI』175-188.海青社.)
- ・麻生将・長谷川奨悟・網島聖 (2019) 「人文地理学研究における視覚資料利用の基礎的研究—絵画・写真の構図に着目して—」空間・社会・地理思想22号、71-84.
- ・麻生将 (2021) 「写真資料からみた近代奄美大島のカトリック」地理66-4、69-77.
- ・石井實 (1988) 『地理写真』古今書院.
- ・石井實 (1999) 『地理の風景—古代から現代まで—』大明堂.
- ・石黒イサク (2001) 「「美濃ミッション事件」をめぐる」(櫻井園郎・石黒イサク・上中栄・瀧浦滋 著『日本宣教と天皇制』49-85.いのちのことば社.)
- ・緒方直人・後藤真編 (2012) 『写真経験の社会史—写真資料研究の出発—』岩田書院.
- ・加賀美雅弘・荒井正剛編 (2018) 『東京学芸大学地理学会シリーズII 第3巻 景観写真で読み解く地理』古今書院.
- ・須山聡 (2007) 「昭和初期の奄美大島における景観復元の試み—洪沢フィルムを用いて—」(平岡昭利編著『離島研究III』161-180.海青社.)
- ・原眞一 (2012) 『写真地理を考える—a Photograph notebook』ナカニシヤ出版.
- ・松井美枝 (2000) 「紡績工場の女性寄宿労働者と地域社会との関わり」人文地理52 (5)、59-73.
- ・美濃ミッション (1992) 『神社参拝拒否事件記録 復刻版』美濃ミッション.
- ・宮下正昭 (1999) 『聖堂の日の丸』南方新社.

〔付記〕

本稿は2020年9月20日のキリスト教史学会大会および2020年10月24日の日本地理学会 秋季学術大会にて発表した内容をもとに作成した。また、本稿の作成にあたってはJSPS科研費基盤研究 (C)19K01193の助成を一部使用した。調査にご協力いただいた美濃ミッションならびに聖アントニオ神学院の皆様には厚く御礼申し上げる次第である。

(あそう たすく 歴史学部非常勤講師)

2021年11月15日受理